１．指定物件の表示及び所有者

指定区分	記 念 物
種　別	史　跡
指定名称 及び員数	浦江１号墳 １基（面積　１，８５０㎡）
所 在 地	福岡市西区大字金武字大塚833-2 他７筆
所有者	牛尾　啓一　他４名

２．概要

浦江１号墳は、早良平野南西部、室見川左岸に形成された標高約45～50mの沖積台地上に立地する。

本墳は、平成13年度から14年度に実施した金武地区農村総合整備事業に伴う調査で発見されたものであり、古墳時代後期～末に形成された14基以上から成る群集墳（浦江古墳群）の内で最大規模の円墳である。１号墳、３号墳以外は墳径約８～12m前後の古墳であり、古墳群は調査区外にさらに広がることが見込まれた。

１号墳の墳丘規模は、直径が東西径約23m、南北径約25m、墳丘高は推定５～６ｍほどの円墳で、２段築成の可能性がある。墳丘の周囲には幅４ｍの溝を巡らすほか、墓道の一部も確認している。

埋葬施設は、複室構造の横穴式石室である。石室は、玄室、前室、羨道部から成り、南に向かって開口している。天井部と側壁上半部は失われ、玄室床面の敷石は一部欠失しているが、側壁の腰石、袖石、框石等は比較的良好に残っている。使用された石材はいずれも花崗岩である。

玄室の平面形は長さ約３ｍ、幅約２ｍの長方形で、側壁の腰石には大ぶりの石材を用い、奥壁には扁平かつ長大な石材を用いている。石室内では須恵器・土師器の他、鏃・刀等の鉄製武器や鉄斧等の工具類、轡等の馬具類、耳環、ガラス製小玉等の装飾品、溝からは須恵器・土師器等が出土している。

墳丘規模や石室構造、および出土遺物からみて本古墳の築造は６世紀後半、追葬等の営墓期間は６世紀末～７世紀初頭までの時期が考えられ、本地域における有力者層の古墳であると見なすことができる。

本古墳の特質として、石室の奥壁に描かれた彩色壁画があげられる。文様の遺存状況はあまり良好ではないが、赤色顔料による渦巻き状の文様「渦文」などが確認できた。

３．指定理由

装飾古墳はこれまでのところ全国的には720基余が知られている。九州には約400基以上が分布し、中国地方日本海沿岸、瀬戸内東部沿岸部、神奈川県、関東北部から東北南部の太平洋側に分布している。当時の政治的中心地であったと思われる近畿地方に少くなく、分布のあり方が地方へ偏り、しかも各沿岸部に分布する傾向がある。これらの古墳・横穴墓が造営された時期は４世紀から７世紀におよぶが、５世紀中頃～７世紀前半に属するものがほとんどを占める。

県内では80基の装飾古墳が確認されており、本市では、昭和53年12月に発見された西区吉武熊山７号墳に次いで浦江１号墳が２例目である。なお「渦文」はこれまでのところこれら２基の古墳にしか認められず、「渦文」が早良平野西南部域の独自の文様であった可能性がある。

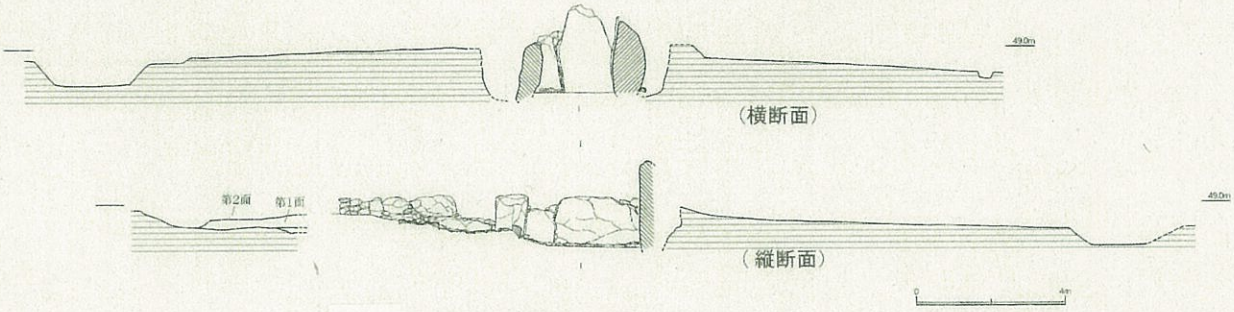
また、浦江１号墳は北西約0.８ｋｍにある市史跡夫婦塚２号墳に先行する当該地域の有力者の墓であり、さらに石室内に残された独自の様式をもつ彩色壁画は、北部九州における古墳時代後期から末期の社会的動向や文化の動態、死生観等を考える上できわめて貴重であることから、史跡として指定する。

４．参考文献

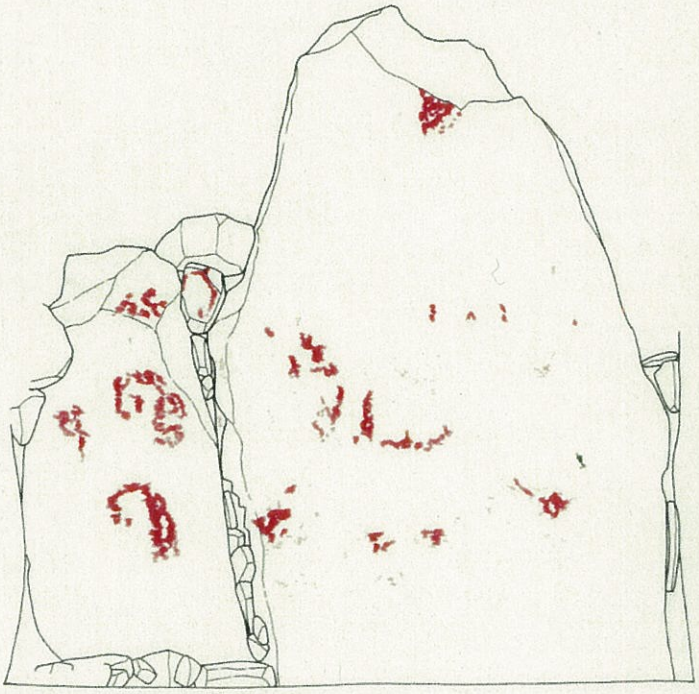
福岡市教育委員会 2005『浦江古墳群１号墳』－彩色壁画を有する古墳の調査－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書862集

浦江１号墳全景（南西から）

石室全景（南から）



石室横・縦断面図



奥壁彩色壁画実測図

奥壁彩色壁画写真